

坊っちゃん社員

原氏鶏太

坊っちゃん社員

五五〇円

無検印

0093—710214—5170

昭和四十六年十二月五日印刷
昭和四十六年十二月十日発行

著作者 源氏鶏太

発行者 角谷奈良雄

発行者 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三二
出張所 東京都新宿区弘方町一丁目
振替・東京二一七五七
電話・(二三〇)二五五〇

坊っちゃん社員

目次

第一話	赴任第一日目	五
第二話	所長派と副所長派	三
第三話	好漢自重すべし	四
第四話	検査役来る	七
第五話	二人の課長	八
第六話	家庭的雰囲気	二〇
第七話	義を見てせざるは	二六

第八話 奉加帳 二五

第九話 当町第一等の美妓 二六

第十話 夜の海 二七

第十一話 危地に残る 二八

第十二話 祭の夜の出来事 二九

第十三話 青春悔多し 三〇

装幀 村上 豊

第一話 赴任第一日目

一

太陽工業株式会社東京の本社で、四月から六月までの三カ月間、新入社員の講習を受けた昭和太郎は、七月某日、東京駅を立って赴任の途に着いた。

行先はN町の工場で、東京から十数時間、西下するのである。N町には急行列車が停らないから、それより三つ手前のY駅でいったん下車し、普通列車に乗換えた。汽車はしだいにN町に近づいて行く――。

太郎は、汽車の窓に顔を近寄せながら、真夏の午後の海の色を眺めている。

大小の島島が、静かに移って来て、静かに視界から去って行く。太郎の横顔には、憂愁の色が漂っているようである。勿論、十数時間の汽車の旅の疲労のせいもあったろう。しかし、二十五歳、五尺六寸、十八貫の身体には若さが漲っている。十数時間ぐらいの旅行で、それほど疲労は感じないはずだ。してみると、憂愁の原因は、ほかにあるものと考えてよい。

新入社員が五人あった。そのうち四人は東京に残り、太郎だけがN町の工場行を命ぜられたのであ

る。出来得れば太郎も東京に残りたかった。何故なら、彼は東京に生れて、東京に育った男であるからだ。その東京には、彼を十歳のときから未亡人暮しで育ててくれた母親がいるからだ。母親は五十歳で、一人息子の太郎だけをたよりにしているのである。

五人の新入社員のうち、誰か一人は、N町にやられるらしい、という噂はあった。太郎もそれを知っていた。

N町の工場には、職員が二〇〇人、工員が一〇〇〇人いて、会社の三つの地方工場のうち、いちばん大きいのである。N町の人口は一万五千ぐらいだが、町の繁栄は工場を切りはなしては考えられない。町に対する工場側の発言は最有力である。N町で、もし工場と全然無縁に生きている家があったら、それは奇跡に属する。

太郎より大学一年先輩の岩代が、太郎に親切顔で忠告してくれた。

「もし、N町にやられるのが嫌なら、いまのうちに運動しとくんだな。」

「運動というと？」

「わかつてるじゃアないか、たとえば、課長の家へ暮夜ひそかに貢物を持っていったり、その他、要するにいろいろだ。しかし、俺は、それをやった訳ではないぞ。だから、誤解は禁物だ。」

「嫌だなア、そんな真似をするのは。」

「嫌ならしなくてもいい。それは君の自由だ。そのかわりN町へ行ったら、苦勞をするぞ。」

「どんな苦勞です？」

「俺もよく知らん。しかし、いけばわかるはずだ。骨身にしみる。とかく、あそこは、我が社でも、

全然、別世界だからな。」

しかし、太郎は、何んの運動もしなかった。そんな気持になれなかったのである。運を天にまかせる大きな気持であった。そんな卑劣な真似までしたくなかった。昔から、潔癖で負け惜しみの強い性格である。結果は、太郎がN町に赴任を命ぜられた。

「だから、運動をしろ、とあれほど親切にいつてやったのに。」

と、岩代がいった。そのあとで、まア、せいぜい苦勞してくるんだなア、とつけ加えた。

他の四人が運動をしたかどうか、みんな何食わぬ顔をしているから、太郎には察しがつかない。しかし、運を天にまかせた結果の悲哀だけは、いま、たっぶり噛みしめているのであった。

「こんな思いをするんなら、運動をしておいた方がよかったかもしれないね……。」

何んとなく、そんな気がしてくる。

そのとき、誰かが、ふらふらッとするめいて来て、海を眺めている太郎の横顔に手をかけ、嫌といふほど、窓硝子に押しつけた。

二

あとで考えると、どうしてそんな乱暴をしたのか、太郎にもわからない。しかし、そのとき思わず、

「痛ッ。」

と、叫んで、反射的に、相手の身体を、片手でぐっと押し返してしまった。腕に力が入っていたのと、相手も身体を起そうとしていた頃合いであつたので、その女（女であることは、とたんにプーンと匂つてきた白粉おしろいの香と、変にぐにヤツとした手応えですぐにわかつた）は、こんどは逆の方向にとんとんとよるめき、危く、尻餅を突きそうになつたところで、椅子に手をかけるや、さっと立ち直つた。そのきまつた姿のよさは、太郎に、まるで、名人の踊りでもみるような鮮やかさであつた。

「失敬。」と、太郎がいったのと、

「まア、失礼じゃアないの。」と、女が叫んで、柳眉を逆立てたのとは、殆どいっしょであつた。

一見、芸者とわかる、十八、九歳の女であつた。怒つた顔は、冴え冴えとして美しい。周囲の客が、総立ちになつて、こつちを見ている。太郎はてれくさくなつた。

「モノのはずみでしたんだ。どうも失敬した。」

「あんた、あやまるの？」

「仕方がない。」

「まア、案外、素直なのね。じゃア、かんにんしてあげるわ。」

あまり物事にこだわらぬ性分らしく、女の緊張した顔が、ニッコリと崩れた。太郎はバカらしくなつて、苦笑でゴマ化すよりしかたがなかつた。女は自分の席へ戻つていった。総立ちの客は、期待はずらしい不満顔で席についた。

太郎は、ふたたび顔を窓に寄せて、海を眺める。赴任の途中でこんな目にあうなんて、どうも幸先の悪い予感がしてくる。さっき、窓にぶつつけたあたりが、ヒリヒリと痛い。そつと手をやつてみる

と、コブが出来ている。何んということだ。コブをつくらされて、その上、あやまらされたわけだ。そのコブを撫でながら、さっきの女の方を見ると、じいっとこっちを見ているところであった。怨めしげな太郎の素振り、コブが出来たと察したらしく、ニヤッと笑った。嬉しそうに笑った、といい直してもよい笑いかたであった。

N駅に近づいてきたらしく、人人が下車の準備をはじめた。太郎も立って、網棚からポストンバッグを降した。ふっと見ると、女も下車するらしい様子である。どうやらN町の芸者であるらしかった。

太郎がN駅のプラットホームに降りると、向うの方に、会社の社旗がひるがえっていた。そして、その周囲に、十数人の若い男たちが騒騒しく集っている。太郎がこの駅に到着する時刻は、あらかじめ工場の総務課へ知らしてあるから、さては出迎えに出てくれたのか、と思った。それにしても、こんなに多勢に出迎えられようとは思いがけなかった。まことに、光栄のいたりである！

しかし、その一団は、太郎がそこまで近づかないうちに、どんどん汽車に乗りはじめた。社旗を持った男も、さっさと乗り込んでいく。そして、みんな汽車に乗ってしまうと、汽車は駅をはなれていってしまった。

ガランとしたプラットホームに太郎は、呆然としている。やがて、自分に還って、にじみ出るような苦笑を浮かべながら、

「だか新入社員の俺に、出迎えなんかあるはずがないのだ。」と、わが胸にいいきかせた。見知らぬ土地へ来たのだ、という孤独感が、どっと押し寄せてくる。面白くない気分である。この

まま次の汽車で、いっそ東京へ戻りたいくらいであった。母の顔が、のろのろと改札口へ歩いて行く太郎の頭の中に点滅していた。

太郎の前を、さっきの女がゆっくりめに歩いていった。

三

太郎は改札口で切符を渡しながら聞いた。

「天神町へは、どう行くんですか？」

「天神町なら……。」

と、駅員が説明にかかったが、この大通りを五丁ほど行って、煙草屋の横を右に曲って、それから三丁ほど先の散髪屋の横をこんどは左に折れて、更に……、と実に複雑な道順である。どうにも、いっぺんや二度では、のみ込み兼ねる。

「天神町なら、あたしが案内したげるわ。」と、横からいったのは、さっきの女であった。

「そうだ、その方がいちばんええ。わしも手間が省けてええ。」と、駅員はあっさり太郎の身柄を、その女に渡した。

「お願いします。」

「いいわ。」と、女は美しい歯並を見せるように笑って、「天神町なら、あんた寧靜寮へいくんですよう？」

「わかりますか。」

「わかるわよ。」と、女は威張った。

駅前に出ると、カンカン照りの太陽の下で、広場の土がすっかり乾燥して、いかにも暑そうである。運送屋があったり、茶店があったり、そして、遙かに屋根の低い家が並んでいる。工場は、この町のいちばん端にあるはずであった。

「ちょっと、輪タクさん。」と、女が呼んだ。

二台いたうちの一台の輪タクが近寄ってきた。女はさっと乗り込み、俺はどうなるんだろう、とボシヤリしている太郎に、

「さア、あんたもお乗りよ。」と、いって、自分の横の席をポンポンとたたいた。

「えッ、相乗りがいい？」と、太郎がおどろいていうと、

「まア、あんた、相乗りなんて言葉を知ってるの？」隅におけないわね。さア、早く、お乗りよ。一人だって二人だって、料金はいっしょなんだから、ちょっとぐらい窮屈でもいっしょに乗らなきゃ損だわ。あら、何をそんなにモジモジしてんのよ。このひと、じれったいわねえ。」

「よし。」と、太郎は、ちょっと気負い立って、輪タクに乗り込んだ。

流石に二人では、やっぱり窮屈である。それよりも太郎は、輪タクが動き出すにつれて、ピッタリ自分の横にくっついた女の身体の躍動するエロティックな感じにほとほと参った。脂粉の香が、ムンムンしてくる。

真ッ昼間からの相乗りを、町の人人は、立ちどまって、じいっと、眺めている。太郎も、くるなり

「早早、こんな真似をしてもいいのだろうか、会社の誰かに見つけられて、あとで文句を食うのではあるまいか、と気になってくる。しかし、女は一向に平気であった。」

「あんた、どこから来たの？」

「東京からだよ。」

「あら、東京なの？　じゃア、転勤？」

「そうだよ。」

「可哀そうに、何んで、東京からこんな田舎へくるのよ。」

「命令だから仕方がないんだ。」

「そう、命令なら仕方がないわね。あたし、さっき、あんたに突っぱねられたときは癪に触ったけど、すぐあやまったから、好きになったわ。だから、これから時々慰問にいつてあげるわよ。」

「慰問って、何んの慰問だい？」

「会社の宴会が、たまには寮の広間であるのよ。そんな時、あたしたちもいくわ。ついでに、あんたの部屋へも遊びにいつてあげることにするわ。そうしたら、東京の話聞かせてよ。」

「君は芸者かい？」

「何も急にそんな軽蔑したみたいな顔をしなくてもいいじゃないの。芸者だって立派な職業婦人よ。」

「いや、ちっとも軽蔑なんかしていない。」

「当り前だわ。あたしは、それでもこの町では一流の名妓よ。」

「へええ。」

「あら、疑ぐつてるの？ 失礼だわ。会社の野田所長さんなんか、あたしにかかったら、ヘナチョコよ。いくらチョコビヒゲなんか生やしたってダメだわ。」

「ふーむ。」

「あたしの名は、とんぼ、というの。」

「とんぼ？」

「そうよ、とんぼ。あんたは？」

「昭和太郎。」

「昭和太郎ね。あたし、覚えたわ。」

そんな話をしているうちに、輪タクは幾曲りかして黒板塀に囲まれた木造二階建の寮についた。輪タクは、とんぼの命令で、そのまま門をくぐり玄関前に停った。

四

「ちょっと、ちょっと番太さーん。」

とんぼは奥に向って、大声を張り上げた。しばらく経つと、奥から、

「誰だ、俺を、番太なんて心やすく呼ぶ奴は——。」

と、いいながら出て来たのは、四十五、六歳の痩せて背の高い男であったが、とんぼを見ると、とんに相好を崩して、

「何アんだ、とんぼ姐さんか、どうしたのかね。おや、相乗りとはおやしくないね。ちょいと、嫉^{うらや}めるね。」

「何を寝言^{ねご}みたいなのをいってんの。お客さんを案内してきてあげたんじゃないの。」

「ほう、そいつはどうも。」

その間に、太郎は輪タクから降りていた。

「東京から転勤してきた昭和太郎だが。」

「やッ、お待ちしていました。」

「どうぞ、よろしく。」

「私がこの寮を責任持って預っている^{まかさないで}婿^{むこ}頭の風早番太です。以後、お見知りおきを。」

「じゃア、あたし、帰るわよ。」

「ここまでの料金を払うよ。」

「いいわよ。百円だけど、あたしおごってあげるわ。」

「ふん、どういう仲かしらんが、とんぼ姐さん、相変らず、氣前がいいね。たまには、こっちにも氣前のいいところを見せてほしいもんだね。」

「ふん。」と、とんぼはせせら笑って、「ラッキイばかりに通ってるくせに。あんた、ラッキイのナに惚れてるって評判だわよ。」

「冗、冗談じゃない。」

と、番太はあわてた。ひょいと振り向いて、奥の氣配を氣にしている。そういえば、奥の方で、そ